3 小値賀諸島
（長崎県小値賀町）

NPO法人 おぢかアイランドツーリズム協会

観光客それぞれに合う《島らしさ》を提供

小値賀町地域おこし企業人　長谷川 雄生

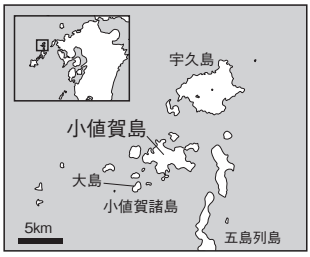
長崎県・五島列島の北部に位置する小値賀諸島（※註）で、島の観光業を盛り上げる組織がある。NPO法人「おぢかアイランドツーリズム協会」（以下、IT協会）だ。小値賀諸島の観光では、「暮らすように旅をする」をテーマに、観光客などが一般家庭にホームステイし、島暮らしを丸ごと体験できる「民泊」や、一棟貸し切りの宿泊施設「古民家ステイ」が人気となっている。人口約二四五〇人あまり、県内でもっとも高い高齢化率約四六パーセント（ともに平成三〇年一一月末現在）のこの小さな町で奮闘するIT協会の取り組みについて、前田敏幸理事長にお話をうかがった。

（※註）離島振興法における離島振興対策実施地域指定では、小値賀諸島は平戸諸島に含まれる。

観光分野の三組織を一本化

IT協会が本格的に活動を開始したのは平成一九年四月だが、組織設立のきっかけは同一六年のいわゆる平成の大合併に遡る。小値賀町は佐世保市との合併を検討していたが、最終的には合併せず自立の道を選択した。人口減少が進む中、主産業が農業や漁業の一次産業の島の活性化はとても厳しい状況であった。そこで、どうやって自分たちで島を盛り上げていくのかを考え、観光の推進という道に踏み出した。

当時、町内には小値賀町観光協会、ながさき・島の自然学校（主に野崎島での観光事業を担当）、おぢかアイランドツーリズム推進協議会（主に民泊事業を担当）の三組織が観光事業に取り組んでいた。小さな島で、それぞれバラバラに



小値賀諸島：五島列島の北部に位置し、小値賀島を中心とした17の島々からなる。総面積25.46km²、町の人口2,452人（平成30年12月現在）。火山噴火で形成されたほとんどの島が西海国立公園に指定。中世には中国などとの貿易、近世は捕鯨で栄えた。畜産、キヌサヤエンドウなどの農業、漁業が盛ん。

おぢかアイランドツーリズム協会の前田敏幸理事長。

活動していては推進力に欠けると、これら三つの組織を一本化し、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会が誕生した。設立当初のメンバーは、ほとんどが移住者だった。

「移住者が小値賀島のために頑張ってくれている姿は、自分の刺激にもなった」と、平成二一年に小値賀島にUターンし、IT協会で働くことになった前田さんは振り返る。「もしもあの時、合併の道を選んでいたら、今のような島にはならなかったと思う。自立を選んだこの町の人びとには、小値賀町という名前をなくしたくない、島をずっと残していきたい、この先もずっと人の暮らしがある島にしたいという想いで、自分たちでできることをやらなくてはいけないという覚悟があったんです」という同氏の言葉どおり、ここから島の観光業が盛り上がりをみせていく。

島の観光の転機となった古民家ステイ

前田さんが協会に入った当時、小値賀への観光客数はまだ多くなかった。小値賀島の東に位置し、無人島である野崎島（登録上は人口一人。平成三〇年六月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産「野崎島の集落跡」として世界文化遺産に登録）は、今では町の主要な観光地となっているが、以前はポツリポツリと観光客がいる程度で、野崎島自然学塾村（島唯一の宿泊施設。廃校となった小中学校を利用）での修学旅行で島に来る子どもたちの受け入れが中心だった。「忙しいのは五月から八月まで。冬の間は、地盤固めのためにとにかく研修を繰り返した。組織の経営的にもかなり厳しい状況だった」という。

修学旅行だけをターゲットにしていては立ちいかなくなると考え、新たな客層としてゆったりとした旅を好む「大人」を対象とした宿泊施設整備や、その施設を核にした島ぐらし体験を模索し始めた。その結果生まれたのが「古民家ステイ」である。小値賀島には日本の古き良き時代を伝える古民家が何軒も残っている。その中から、築数百年を超える古民家を快適な空間にリノベーションし、宿泊施設として提供するのが古民家ステイだ。人の手で組み上げられた柱や梁など、もともと古民家の持つ古き美しさに快適

小値賀諸島・大島での民泊の様子。

性を加えたこの宿は、見事に都会の方々のニーズに沿い、みるみるうちに観光客が島を訪れるようになった。前田さんは「古民家ステイができて都会の観光客をよく見かけるようになった。各地から注目を浴びて、毎週のように取材や視察が来た」と当時の様子を語る。

民泊を通して生まれる移住や交流

島に注目が集まるにつれ、古民家ステイだけでなく民泊を利用する観光客も増え始めた。島で民泊を受け入れてくれる家庭の正式登録数も三五軒にまで増えた。「最近、関東からの一人旅や二人旅、カップルが増えてきた」と話すのは、ＩＴ協会の民泊部会長で、ご自身も民泊を受け入れている中村信子さん。多いときは月に一〇組以上の受け入れがあるそうだ。平日は仕事、週末に民泊といった具合で休む間もなく大忙しだが、「以前はおとなしかったんだけど、民泊を始めてよくしゃべるようになった。お客さんからもいろいろな話を聞けて楽しい。お客さんが島の景色をきれいって言うから、あらためて眺めてみると確かにその通りだなって気づくことができた。お手紙で交流を続けている人もいるし、民泊がきっかけで移住してきた人もいる。サバが好きな移住者には、手に入ったら持っていっちゃうこともある」と、民泊を受け入れる楽しさを笑顔で語る。

一般的な観光協会の役割は、観光客に宿泊施設を紹介して終わりだが、ＩＴ協会の特筆すべき点は、宿泊施設を自

らが管理・運営しているところだ。古民家ステイでは、予約の受付はもちろんのこと、宿までの送迎、施設の案内や日ごろの維持管理まで自分たちで行っている。民泊についても、予約の受付や民家での体験プログラムの相談などのまとめ役まで担っている。つまり、観光客にとってはワンストップ窓口となっており、非常に分かりやすいのだ。

一人ひとりにあったオリジナルな観光づくり

宿泊事業以外に取り組んでいることが、民泊のプログラムにはない体験メニューの提供だ。野崎島を一例にとると、世界文化遺産の価値を伝えるガイドツアーとトレッキングツアー、自然学塾村での子どもキャンプの受け入れなどを実施している。野崎島は南北約六・五キロメートルに細長く伸びる島であり、歴史的価値の高い場所である。例えば、北部には沖ノ神島神社が社殿を構え、その後方には、自然物なのか人工物なのか定かになっていない「王位石」という高さ二四メートルにもなる鳥居型の巨石が鎮座している。一九世紀中頃、長崎の外海地域の潜伏キリシタンは、氏子として神道の聖地に移住すればキリシタンと疑われる可能性が低いと考え、この野崎島に移住したと言われている。島の南部には潜伏キリシタンが開墾した舟森集落跡がある。こうした南北の資産にたどり着くには険しい山道を抜ける必要があり、ガイドスタッフの同行が必須となっている。

小値賀島では、北部にある柿の浜海水浴場で行うシーカヤックが人気メニューとなっている。観光客からは、エメラルドグリーンの海の上に浮かぶ体験は島ならではと評価が高い。このほか島内他事業者と連携した魚捌き体験や島の特産品である落花生の加工体験、島の赤土を使った焼き物体験、島で一〇〇年以上続く印刷所での活版印刷体験なども提供している。

また、観光客に対するおもてなしの方法にもこだわりがあり、島へ来てもらう前にきちんと島のイメージを伝えることを大事にしているそうだ。当然だが、離島には都会と比べ不便な部分がたくさんある。あるもの・ないものを含

観光客に人気のシーカヤック体験。

め、情報を正確に伝えることで、観光客が島でがっかりすることがないように気をつけている。

観光客一人ひとりの要望をしっかり聞き取り、島の現状などを説明しながら、その方のオリジナルの観光となるような体験メニューを組み立てていく。きめ細かな対応、おもてなし精神こそがＩＴ協会の真骨頂だ。

島人の想いを観光面から実現する組織

このような取り組みの成果は数字にも表れてきている。ＩＴ協会の年間の売上は、設立当初約四〇〇〇～五〇〇〇万円だったのに対し、現在は約一億円となっており、当時の倍にまで成長している。また、ＩＴ協会を通して小値賀に宿泊する観光客は年間約五〇〇〇人。全体の宿泊客数が約一万人なので、じつにその半数を受け入れていることになる。前田さんは「古民家ステイをきっかけに小値賀のことを知っていただける人が増えた」と指摘する。もちろん、それにともなって旅館・民宿の宿泊客数も増えているという。また、ＵＩターン者が増え、観光客などを対象にした新たな宿や飲食店なども出てきており、ＩＴ協会の取り組みが町を元気にしていると言っても過言ではないだろう。

「民間レベルで観光に本気で取り組んでいただいている。民泊も受け入れ家庭がほとんどなかった状況から立ち上げ、ここまで成長させてくれた。民泊・古民家ステイ・自然体験メニューなどの島暮らしを伝える観光プログラムは、国内外の観光客に感動を与えている。農家さん、漁師さん、商店の経営者、地元の方々はもちろん、ＵＩターンの若者を取り入れながら幅広い視点で組織を形成し、運営してきたことも大きい」と、ＩＴ協会設立当時から行政の立場でともに歩んできた町役場の牧尾豊さんは評価する。

独自の仕組みを考え、発信していくこと

一方で、事業を継続していくための課題も見えてきている。設立当初に比べ活動の幅が大きく広がったため、人材不足になっているという。

「もっと多くの方に小値賀島を知ってもらうため、広報・情報発信に力を入れたいが、それに専念する余裕がない。今後、その専属担当を割り当てたいが、人材確保が課題」と前田さんは指摘する。また、今後の方向性として、体験メニューの提供などについて、観光客が島に来てからの受け入れは住民の方々が、島へ来てもらうまでの取り組みをＩＴ協会が担うという役割分担が必要になってくるという。前田さんは、「今までは私たち自身がプレーヤーとして体験メニューを提供してきたが、今後は島の方々にもプレーヤーとしての役割を果たしてもらいたい。そのためのコーディネート役をわれわれが担っていきたいと考えているが、その人材育成も急務」と課題を口にした。

一〇年以上民泊を受け入れている中村さんは、「プログラムの内容が最初からほとんど変わっていない。リピータ

ーが少なくなってきている気がする。どんどん変えるのも難しいけど、適度な変化がほしい。全国の田舎でも同じような取り組みを始めており、みんなで独自の取り組みを考えていかなければ」と話す。

このほか「古民家ステイは約一〇年が経ち、維持補修費用がかかってくる。野崎島も、現在の環境を維持するための費用が必要。こうした費用を自分たちで工面できるような組織とならなければいけない」と、前田さん。具体的には、野崎島で少しでも観光客にお金を落としてもらう仕組みづくりを検討しているという。平成二九年にオープンした野崎島ビジターセンターでの物産販売や、募集型企画旅行（パッケージツアー）などを企画していきたいと意気込む。

町役場の牧尾さんが、「自立した組織運営、自分たちの収益と地域への経済効果の両立が今後の大きな課題となるのではないか。行政としては、企画などの支援などに協力していきたい」と話すとおり、ＩＴ協会と行政の連携は必須といえる。

「小値賀を残したい」という想いに沿った活動を

課題は多いが、島に人が住み続けられるよう地域に貢献していくことがＩＴ協会の使命だ。「まずは小値賀を知っていただき、次に島へ来てもらいたい。小値賀ファンになってもらい、最終的には島に住みたいと思ってくれる人を増やしたい。そのために島らしさを大事にしている。新しいメニューをつくるにしても、もともと島にある素材を使うようにしている。かつてあったものを復活させたり、それらをベースにして今のニーズに応える形でサービス化している。島の状況がガラッと変わってしまうようなことはしない」と、取り組みのコンセプトについて語る前田さん。組織設立の島人たちの想いでもある「小値賀を残したい」というマインドは、しっかりと継承されている。

●

現在、筆者は「地域おこし企業人」として小値賀町で働いているが、いずれは島の次世代を担う一住民としてＩＴ協会とどう協力していけるか、模索していきたい。■

長谷川雄生（はせがわ ゆうき）
1985年生まれ。長崎県新上五島町出身。就職を機に上京。建設コンサルタントである八千代エンジニヤリング（株）にて7年間まちづくりの仕事に携わる。2017年4月に総務省の地域おこし企業人制度を活用し、同社から小値賀町へ出向。